

【本編】

幸福な忘却〜没落令嬢が二人の好事家に調教され、生きた調度品になるまで〜

【小話集】……78

- ・従順なる黒鳥（メイド・オブ・サイレンス）
- ・罪深き白兔（バニー・オブ・プロフェーン）
- ・永遠の揺り籠（ベイビー・イン・クリスタル）
- ・背徳の聖母（プロフェーン・シスター）
- ・ゼンマイ仕掛けの愛娘（クロックワーク・ドール）

【本編後日談】……90

ヴァランシエール邸は、もはや死者の住処のような静寂に包まれていた。

かつては贅を尽くした調度品が並んでいた場所も、今は競売の目印である赤い札が、剥製に刺されたピンのようにあちこちに貼り付けられている。

リリア・ド・ヴァランシエールは、埃の舞う部屋の隅で、鏡の中に映る自分を見つめていた。着古した、けれど手入れだけは行き届いたシルクのドレス。没落したとはいえ、彼女の肌は相変わらず白磁のように滑らかで、その瞳は悲劇を予感させるように潤んでいる。

「……リリア。……聞こえているのか、リリア」

背後から疲れ切った父の声がした。かつては威厳に満ちていたその声も、今は債権者たちの罵声に削られ見る影もない。

「……来週にはこの屋敷も明け渡さなければならない。……お前の行き先だが……。……ある蒐集家から話が来ている」

リリアは鏡を見つめたまま、微かに唇を震わせた。「行き先」という言葉の裏にある意味を、彼女は十分に理解していた。それは結婚でも、奉公でもない。……彼女という「美しき血統」そのものを、標本として買い取りたいという、狂気じみた好事家への身売りだ。

「……その方は、……私を、……どうされるのですか？」

「……『大切に飾る』と言っている。……一生、何不自由ない暮らしを約束すると。……ただし、二度と表舞台に出ることは叶わない。……お前は、彼らの私的なコレクションの一部になるんだ」

大切に飾る。その言葉が、リリアの胸の中に、冷たい、けれど甘美な波紋を広げた。……飾られる。……そう、……私は、……もう人間でいることに疲れてしまった……。

没落してからの数ヶ月。リリアを待っていたのは借金の督促と、かつての友人たちからの冷笑、そして「女」としての価値を品定めする下卑た視線ばかりだった。

自分の意志で歩き、自分の意志で呼吸し、自分の意志で未来を選ぼうとするたび、現実 herself 彼女の心は無慈悲に踏みつけにした。

リリアは、鏡の中の自分の細い首筋に、そつと指を触れた。

……もし私がモノになれたなら。ふと、そんな空想が脳裏をよぎる。

モノになればもう誰も私を責めない。明日の心配もしなくていい。ただ美しく磨かれ、主人の望むポーズで静止していれば、それだけで「愛される価値」が生まれる。

「……お父様。……そのお話お受けいたします」

「リリア……っ。……すまない、……情けない父を許してくれ……」

父が泣きながら部屋を去った後、リリアは再び鏡に向き直った。

彼女は引き出しから、最後のひとつとなった宝物——母親の形見の、重厚な真珠のチョーカーを取り出した。それを自分の首に、苦しいほどきつく巻き付ける。

「……あ、……う……」

物理的な圧迫感が、喉を締め上げる。呼吸が浅くなり、視界がわずかに歪む。けれど、その苦しさ、リリアにとっては不思議なほどの「安らぎ」をもたらした。

「……そうだわ。私はこうして縛られていたい。……誰かに、……『君は動かなくていい』と、……言ってもらいたい。……」

彼女はそのまま、図書室の中央にある大きな椅子に、背筋をピンと伸ばして座り込んだ。両手を膝の上に置き、顎を上げ、瞬きひとつせずに、虚空を見つめる。

身体が強張り、関節が痛み始める。けれど、その痛みこそが、自分が「静止している」という確かな証拠だった。

(……私は、……お人形。……ヴァランシエール家の、……最後の装飾品……)

脳内でおまじないのように繰り返す。

すると、あんなに恐ろしかった未来が、まるで宝石箱の中に閉じ込められるような、甘やかで安全な場所に見えてきた。

「……早く私を壊して」

リリアは、まだ誰もいない部屋で、未来の主人たちへ向けて、言葉にならない祈りを捧げた。

森の冷気は、リリアの薄い外套を容易く通り抜け、その白磁の肌を容赦なく刺した。馬車は、森の入り口で彼女を降ろすと、逃げるように走り去っていった。残されたのは、深い霧と、その奥にそびえ立つ巨大な鉄の門。そして、たった一人の没落令嬢だけだった。

リリアは震える肩を抱きしめた。手に持った小さなカバンには、最低限の着替えさえ入っていない。そこにあるのは、かつての自分を証明する書類と、二人の好事家——ヴィクトールとカインから届けられた、一通の招待状（契約書）だけだ。

『君のすべてを、永遠の静寂に捧げる用意があるならば、この門を叩け』

リリアは、門の手前で立ち止まり、夜の森の匂いを胸いっぱい吸い込んだ。これが、自分の意志で吸う、最後の空気。これからあの門を潜れば、呼吸さえも「管理」されることになる。自分の肺がどれほど膨らむかさえ、他人に決められる「モノ」になるのだ。

「……………ふう……………っ」

吐き出した息が、白く霧に溶けていく。リリアは自分の脚を見つめた。細い、けれどまだ自分の意志で一步を踏み出せる脚。……………けれど、その自由が、今の彼女には何よりも重荷だった。歩きたくない。どこにも行きたくない。ただ、誰かに抱え上げられ、台座の上に設置され、「君はそこにいればいい」と言われたい。

(……………怖い。……………でも、……………楽しみな。……………お名前も、……………恥ずかしい思い出も、……………全部、門の向こうに、……………捨ててしまえるなら)

彼女は、カバンの中から一粒のキャラメルを取り出し、口に含んだ。これが、自分の意志で選ぶ最後の「味」になるかもしれない。キャラメルが溶けていく。甘さが消えていく。

それと同時に、リリアの中で「人間」としての芯が、音を立てて崩れていった。

「……さようなら、リリア・ド・ヴァランシエール」

彼女は空になったキャラメルの包み紙を、霧の底へと落とした。それは彼女が「自分」という存在を捨てた、最初の手向けだった。リリアは最後にもう一度だけ、深く、深く深呼吸をした。肺の隅々まで、冷たく自由な空気を満たし、それをゆっくりと、未練を断ち切るように吐き出す。

そして、一度も振り返ることなく、鉄の門扉へと手を伸ばした。冷たい金属の感触。

それは、これから彼女を永遠に縛り付ける、美しき枷の予感。

「……お迎えに、ありがとうございました。……ご主人様」

リリアが門を叩いたその瞬間、森の静寂が破られた。

館の中は、驚くほど静謐だった。廊下の壁には、精巧な自動人形（オートマタ）たちが飾られ、彼女を物言わぬ瞳で見つめている。

案内された広間の奥で二人の男が待っていた。

「いらっしやい、リリア。待ちわびていたよ。君という至高の素材が、自らここへ歩んでくるのを」

銀縁の眼鏡をかけ、完璧な三つ揃いのスーツを纏った男——ヴィクトールが、温度のない微笑みを湛えて立ち上がる。

その隣、長椅子にだらしく身体を預け、赤い葡萄酒を揺らしているのがカイン。彼は、獲物を値踏みするような、無邪気で残酷な瞳を彼女に向けた。

「あはは！本物だ、ヴィクトール！噂通りの綺麗な肌……。ねえ、君がリリア？自分の足で歩くのは、今日が最後だって分かっててここに来たんだよね？」

リリアは、震える膝を隠すようにドレスの裾を強く握りしめた。けれど、その瞳にはもう迷いはない。

「……はい。……私をモノにしてください。もう、何も考えたくない。……ただ飾られて、愛されるだけの……人形に」

その言葉を聞いた瞬間、ヴィクトールの瞳が冷徹な審美家のそれへと変わった。

「……いい覚悟だ。ならば、契約の儀式を始めよう。君の身体から『人間』を脱ぎ捨てさせなければならぬ」

ヴィクトールの合図で、リリアは部屋の中央に置かれた、冷たい大理石の台の上に乗せられた。

二人の主人が、彼女を挟むように立つ。

「まずは、この無駄な外装（ドレス）を捨てようか」

カインの手が、リリアの背中ของ ファスナーに触れる。昨日まで、彼女を守る鎧だった絹のドレスが、カインの荒々しい手つきで引き裂かれ、床に落ちた。肌寒い夜気にさらされ、リリアの白い肌が粟立つ。

「……っ、あ……」

「恥ずかしがる必要はないよ。君はもう、恥を知る『女性』ではなく、これから磨き上げられる『素体』なんだから」

ヴィクトールが、冷たい手袋をはめた指で、リリアの顎を掬い上げた。

全裸となったリリア。その姿は、あまりにも脆く、そして美しい。

「……まずは、姿勢（ポーズ）の基礎を整えよう。リリア、君の立ち方は美しすぎる。意志が

籠りすぎているんだ」

ヴィクトールが用意したのは、銀色に光る、首から腰、そして手足の関節を強制的に固定するための『第一拘束具』だった。

ひんやりとした金属が、リリアの柔らかな肌を締め付ける。

「動いてはいけない。君の役割は、僕たちの美学を完璧に体现することだ。呼吸を整えなさい。僕の決めた角度、僕の決めた高さ……それ以外に意味はない」

ヴィクトールは、リリアの背筋を不自然なまでに反らせ、顎を高く上げさせた状態で、首輪のネジを固定した。

自らの意思では、もう下を向くことさえ叶わない。

「次はボクの番だね！」

カインが笑いながら、大きなトレイを運んできた。そこには、世界中の贅を尽くした、けれ

ど異常なまでに重厚な宝石や真珠が並んでいる。

「お人形さんは、綺麗じゃないとね。ほら、この真珠のネックレス……リリアの細い首が折れそうになるくらい、たっぷり巻いてあげる」

カインの手によって、数連、数十連もの真珠がリリアの首にかけられた。数キロの重量が、首輪で固定された彼女の首に容赦なくのしかかる。

「あはは！ 逃げられないように、重く、重くしてあげるんだよ。君はもう、自分の力で一歩も動けない。……ほら、足首にもこの『黄金の重り（アंकレット）』を」

カインがリリアの足首に重厚なリングを嵌めると、彼女はもはや、自分の足でバランスを保つことさえ困難になった。

全裸に、首輪と重い真珠、そして足枷。立っているのが精一杯の、無力な「飾り」。

「……いい眺めだ。……さて、リリア。最後の、そして最も重要な契約を交わそう」

ヴィクトールが、彼女の唇に指を当てた。

「君の『ナカ』も、僕たちの色で染め上げなければならない。……君の知性を溶かし、僕たちなしでは快感さえ得られない、空っぽの器にするために」

ヴィクトールがリアアの脚を左右に開かせ、台の縁に座らせる。彼女の「聖域」が、二人の主人の視線にさらされた。

「……あ、……んんっ!!（はずかしい、……でも、……なにかが、……なかが、疼いて……っ!!）」

ヴィクトールが、温められた粘度の高い「お掃除液」を、シリンジで彼女のナカへゆつくりと流し込んでいく。

「……ひ、……あ、……ああっ!!……なかが、……熱い、……なにか、……はいつて、きます……っ!!」

「君の汚れを、僕たちの愛で洗い流すんだ。……ほら、こんなにパンパンに張っている」

お腹が不自然に膨らみ、リリアは内側からの重量感に支配される。そこに追い打ちをかけるように、カインが彼女のナカへ、激しく振動するクリスタル・プラグを差し込んだ。

「……ひ、……あざいいい！！♡ ……しんどう、が……脳みそまで、……ひびいて……
っ！！」

「あはは！これが『お人形の心臓』だよ！ほら、最後はこれでお口に栓をしなきゃね」
カインは、白磁の球がついたビットギヤグを、リリアの口に深く嵌め込んだ。

「……んん、……んんーっ！！♡」

言葉を奪われ、首を固定され、重い宝石に押しつぶされ、ナカは激しい振動と重みで満たされている。ヴィクトールが潤んだ瞳を覗き込む。

「……おめでとう、リリア。今、この瞬間、君は人間を辞め、僕たちの『ドールハウス』の住

人になった」

カインが、リリアの頭を優しく、けれど乱暴に「よしよし」と撫で回す。

「……いい子だねえ。……これからは、何も考えなくていいんだよ。……苦しいのも、熱いのも、全部ボクたちが『管理』してあげるからね……♡」

リリアは、激しく震えるナカの刺激に翻弄されながら、お口の球を「ちゅうう……」と吸い込んだ。

難しい言葉も、没落の悲しみも、ピンク色の霧の中に消えていく。目の前にいる、自分をモノとして愛でてくれる二人の神様。

リリアは、宝石の重みでガクガクと震える膝をつき、支配者たちの足元で、ただ絶頂の飛沫を上げるだけの「愛玩具」として、最初の一夜を迎えるのであった。

深い眠りから覚めたとき、リリアは自分が、昨夜とは違う場所にいることに気づいた。そこは館の北側に位置する「調律室」。壁一面に並んだ巨大な鏡と、天井から吊るされた銀の滑車。そして中央には、人形を立たせて固定するための背の高いスタンドが据えられていた。

「おはよう、リリア。まだ少し、瞳に『人間』の迷いが残っているようだね」

鏡越しに、ヴィクトールが冷たい声をかけた。彼は上着を脱ぎ、白いシャツの袖をまくっている。その手には、絹のように滑らかだが、鋼のように強靱な芯の入った、純白のコルセットが握られていた。

昨夜、重厚な真珠とプラグで「モノ」としての初夜を迎えたリリアは、今は薄いシユミーズ一枚だけを纏わされている。プラグの刺激がまだナカに残っているのか、彼女が歩くたびに、内側から「キュウ」と甘い音が漏れた。

「……ヴィクトール、さま。……ここは……」

「君の輪郭を、再定義する場所だ。……さあ、そこへ立ちなさい。背筋を伸ばし、腕を上げて。

……僕の描く、最も美しい曲線の中に、君を閉じ込めてあげる」

リリアは言われるまま、スタンドの前に立った。ヴィクトールは彼女の背後に回ると、コルセットを彼女の腰に巻き付けた。

その瞬間、リリアは自分の「自由」が、物理的な圧力によって削り取られていくのを感じた。

「……あ、……あ……っ」

「まずは仮締めだ。……いいかい、リリア。お嬢様としての君は、呼吸を自分の意志で管理していた。だが、これからは違う。……僕が締める分だけしか、君は息を吸うことができない。

……僕が許す分だけしか、君の肺は膨らむことができないんだ」

ヴィクトールが、コルセットの背紐を、一気に引き絞った。

ミシミシ、という絹が悲鳴を上げるような音。リリアの柔らかな腹部が、容赦なく内側へと

押し込まれ、肋骨が軋む。

「……ひ、……あ、……くるし、……ヴィクトール、さま、……いきが……っ!!」

「無駄な酸素は、無駄な思考を生むだけだ。……もっと浅く、もっと早く。……小鳥のように、僕の手のひらの中で震えていればいい」

さらに一段、紐が引かれる。リリアのウエストは、両手で掴めそうなほどに細く、鋭く挟まれていく。

肺が圧迫され、酸素が足りなくなった脳が、ピンク色の火花を散らす。視界が白く霞み、リリアは自分が「人間」であることを忘れ、ただ「締め付けられている苦痛と快感」だけの存在になっていく。

「……んん、……んっ、……んうう……っ!!♡」

「そうだ。その表情だ。……苦しさに耐えかねて、瞳が潤み、唇が半開きになる。……その顔

こそが、僕の求めていた『絶望する人形』の美しさだよ」

ヴィクトールは、リリアの首に、ボーンの入った非常に高いチョーカーを嵌めた。

それは彼女の首を垂直に固定し、いかなる理由があっても顎を引くことを許さない。リリアは、常に上を向き、主人の顔を見上げることしかできない「捧げもの」のポーズで固められた。

「あはは！ヴィクトール、だいぶ仕上がってきたね！」

部屋の扉が開くと、カインが無邪気な足取りで入ってきた。彼の手には、ピンク色に光る、淡い粘度を持った「お掃除液」がなみなみと注がれた硝子の器がある。

「ねえ、リリア。コルセットで上が持ち上がった分、ナカが空っぽに見えるよ？……ほら、ボクがもつと『ほんばん』にしてあげなきゃ」

カインは、コルセットで極限まで締め上げられたリリアの腰を抱きしめると、ドレスの裾も何もない、剥き出しの彼女の下肢へと手を伸ばした。

昨夜のプラグが抜かれると、溜まっていた蜜が「ドロリ」と溢れ出す。

「……なか、……からっぽ、……さびしいの……っ♡」

リリアの口から、無意識に甘えた言葉が漏れる。コルセットの圧力で知性が溶け、彼女はどう、自分の身体を他人に弄ばれることに、何の抵抗も感じなくなっていた。

「いい子だねえ。ほら、飲ませてあげるよ。……君のナカに、ボクとヴィクトールの『愛』を、一滴も余さず詰め込んであげる」

カインは、器の中の液体を、太いシリンジでリリアのナカへ、限界まで「充填」していった。コルセットでお腹が締め付けられているため、液体の行き場がなく、ナカの圧力は異常なまでに高まっていく。

「……ひ、……ひいっ!!……おなが、……はちぎれる、……なが、……あついのお
お♡」

「漏らしてはいけないよ、リリア」

ヴィクトールが、彼女の耳元で冷たく囁き、同時にコルセットの最後の仕上げとして、一番下の紐を「グイッ」と力任せに引いた。

上からはコルセットの容赦ない締め付け。下からはカインが注ぎ込む愛の重圧。リリアは、上下から押し潰されるような感覚の中で反り返った。

ヴィクトールが、彼女の出口に、昨夜よりも一回り大きく、重厚な黄金のプラグを「ガツン」と深く打ち込む。

「……んんんんーっ！！♡♡」

言葉にならない絶頂。コルセットの芯が肋骨に食い込み、ナカのプラグが子宮の入り口を激しく叩く。リリアは自分が「装飾品」として、主人の色で完璧に密閉されたことを、脳の芯まで叩き込まれた。

「……よし。……今日の『ポーズ』はこれで決定だ。……カイン、彼女を標本室へ。……月が沈むまで、彼女はこの『形』のまま、僕たちの視線を楽しませてくれるだろう」

ヴィクトールは、満足げに彼女の頬を撫でた。リリアは、もはや自分の意志で指先ひとつ動かすこともできず、ただ「ヒツ、ヒツ……」と、極限まで制限された細い呼吸を繰り返しながら、美しき生きた彫像へと変貌を遂げたのであった。

調律室から「標本室」へと移されたリリアを待っていたのは、目も眩むような光の洪水だった。そこは、世界中から集められた希少な宝石や貴金属が、ベルベットのクッションの上に整然と並べられた、美しき略奪者の宝物庫。

「さあ、リリア。君という真つ白なキャンバスに、ボクのコレクションを全部盛り付けてあげよう」

カインが楽しげに指を鳴らす。ヴィクトールのコルセットによって、リアの腰は折れそうなほど細く、胸元は高く押し上げられ、首はチョーカーによって垂直に固定されている。彼女は今、自らの意思で視線を動かすことすらままならない「垂直の標本」だった。

「……あ、……ん、……からだが、……かたいの……。……うげ、ない……っ」

「動かなくていいんだよ。お人形は、ボクたちが飾ってあげるのをじっとして待っていればいいの。……ほら、まずは首筋から」

カインが手に取ったのは、大粒の南洋真珠が幾重にも重なった、滝のようなネックレスだった。一本、また一本と、すでにヴィクトールのチョーカーで固定された彼女の細い首に、その真珠が巻き付けられていく。十連、二十連……その数は増え続け、真珠の重みだけで数キロに達した。

「……くっ、……あ、……ああ……っ!!」

リリアの喉が物理的な重量に圧迫されて悲鳴を上げる。

チョーカーが支えていなければ、首の骨が容易く折れてしまいそうな重圧。首筋に食い込む真珠の冷たさと、そこから伝わる確かな「質量」が、彼女の意識を現実から切り離していく。

「あはは！首がしなってるよ、リリア。……次は腕だね」

カインは、リリアの両手を取った。彼女の指一本一本に、巨大なエメラルドやルビーがあしらわれた、重厚な黄金のリングを嵌めていく。さらに手首には、幅の広い、重い真鍮製のバングルが幾層にも重ねられた。

「君のその綺麗な手は、もう何を持つ必要もないんだ。……ただボクに愛でられるためだけの、重い装飾」

仕上げに、カインはリリアの足首に、純金製の重厚な鎖を繋いだ。その鎖の先には、床に固定された巨大な錨のような重りが鎮座している。

「……あ、……あは、……あはは……。……からだ、……とけて、いくみたい……。……床に、……吸い込まれちゃう……。っ」

極限まで締め上げられたウエスト。首を押し潰す真珠の重量。腕を下へと引きずる指輪とバングルの重み。そして、床に釘付けにする足枷。

リリアはもはや、自分の力で一步を踏み出すことも、立ち続けることさえ不可能になった。ガクガクと震える膝が限界を迎え、彼女は「モノ」が崩れ落ちるように、その場に跪いた。

宝石同士がぶつかり合い、贅沢で不道德な金属音が静かな部屋に鳴り響く。

隙間から漏れる声は、知性を失い、純粋な依存に染まっていた。

跪いた姿勢のまま固定されたリリアの前に、ヴィクトールが音もなく歩み寄る。

「……実にいい。……自力で立つことさえできない無力さ。……これこそが、僕たちの求めて

いた『完全な愛玩物』の姿だ」

ヴィクトールは、跪くリリアの髪を優しく撫でながら、彼女の背中のコルセットをさらに一段、強く引き絞った。

肺にわずかに残っていた空気が吐き出され、リリアの瞳から悦びの涙がこぼれ落ちる。

「……さあ、カイン。……仕上げを始めよう。……これほど重く、美しく着飾った彼女を、内側からさらに『重く』してあげなければ」

カインが待つてましたと言わんばかりに、リリアの足の間に跪く。

重い宝石で飾られた彼女の脚は、自力で閉じることさえできず、無防備に左右へと開かれた。カインは、昨夜から彼女のナカを占有していた黄金のプラグを、一気に引き抜いた。

「……あ、……あざいいい！！♡」

密閉されていた熱い愛の飛沫が、宝石の鎖を濡らしながら溢れ出す。空っぽになった喪失感に、リリアは腰を激しく震わせた。

「……からっぽ……、……さびしいの、……カイン、さま……。……なかに、……なにか、……いれてえ……っ!!」

「あはは！ 本当に欲しがりなドールだね。……ほら、今度はもつとすごいよ。……この『水銀のように重い特製ゼリー』を、君のナカに限界まで充填してあげる。……君のお腹を、宝石よりもずっと重くしてあげるからね」

カインは、冷たくて重い、特殊な高比重のゼリーを、シリンジを使ってリリアのナカへ注ぎ込み始めた。お腹の奥に、ずっしりとした、これまでに経験したことのない「物理的な重み」が溜まっていく。

コルセットで締められた内臓が、その重みに圧迫され、リリアの脳はパステルピンクの快感で焼き切れていく。

「……あ、……あ、……おなが、……しずんでいくう!!心……おもたい、……おもた

いよおお!!♡」

「……仕上げだ」

ヴィクトールが、リリアの出口に、さらに太く、さらに重い『超重量クリスタル・プラグ』を、深々と打ち込んだ。ドクン、と全身が跳ね上がる。

首の真珠、指の黄金、そしてナカに詰め込まれた未知の重量。

リリアは、全身を「重さ」という名の支配に塗り潰され、言葉にならない多幸福感の中で白目を剥いた。

彼女はもう二人の主人の手助けなしには、上半身を起こすことさえできない。

床に跪き、首を宝石で固定され、ナカを愛の質量で満たされたまま、リリアは至福の表情で、主人の靴先を舐めるように甘え続けるのであった。

館のメインダイニングは、教会の礼拝堂を思わせるほど天井が高く、壁には一面に贅を尽くしたタペストリーが掛けられている。中央に置かれた長い黒檀のテーブル。その末端から少し離れた場所に、リリアは「設置」されていた。

今日の彼女が纏わされているのは、深い濃紺のベルベットに金糸で刺繍を施した、気が遠くなるほど重厚なドレスだ。しかし、それはただの衣装ではない。ドレスの裏側には、ヴィクトールの手によって精密に設計された、チタン製の「外骨格（エクソスケルトン）」が仕込まれている。彼女の脚は優雅に揃えられ、背筋は不自然なほどに反らされ、右手は胸元に、左手は椅子の肘掛けを軽く撫でるような形で——完全にロックされていた。

「……んん、……んんんっ」

お口のビットギャグが、彼女の言葉を物理的に遮断する。指先ひとつ、睫毛の動きひとつ。それさえもヴィクトールの計算通りの「静止」の中にあった。ドレスの中に隠されたフレーム

が彼女の関節を支え、同時に、動こうとする意志を鋼の硬さで跳ね返す。

リリアは今、自らの肉体という名の檻に閉じ込められた、生きた装飾彫像（オーナメント）だった。

「ヴィクトール。今日の彼女の『ポーズ』、過去最高に決まっているね。その絶望と恍惚が混ざったような、空っぽな瞳……。まさに我が館の最高級のコレクションだ」

カインが楽しげにナイフを動かし、熟成された肉を口に運ぶ。テーブルの上には、最高級のワインと料理。主たちが優雅に食事を楽しむその数メートル先で、リリアはただ「そこに在る」ことだけを強要されていた。

「ああ。関節の固定角度を三度ほど上げたのが正解だった。筋肉の緊張がドレスのドレープをより美しく引き立てている。……リリア、聞こえるかい？ 君が今、こうして静止しているだけで、僕たちの食事がこれほど豊かなものになる。……素晴らしい貢献だと思わないか？」

ヴィクトールが、グラスを掲げてリリアに微笑む。リリアは答えられない。ただ、高いチョーカーに固定された視線を、主人の美しい顔へと向け続けることしかできない。

彼女の知性は、極限まで締め上げられたコルセットによる酸欠と、ナカで絶え間なく鳴り響くクリスタル・プラグの振動によって、パステルピンクの泥のように溶け出していた。

主たちが自分を「人間」として扱わず、あたかも壁に掛かった絵画や、高価な花瓶と同じトーンで論じていること。その究極の疎外感が、リリアにとっては耐えがたいほどの多幸感をもたらしていた。

「……おや。カイン、見てごらん。彼女のドレスの裾が、少し震えている。……まだ『教育』が足りないようだ」

ヴィクトールが、不意に食事の手を止めた。リリアの心臓が跳ね上がる。固定された姿勢のまま、彼女の身体が微かに強張った。

「あはは！ 本当だ。……ナカの重みが、我慢できなくなっちゃったのかな？ ……よしよし、

可哀想なリリア。お掃除の時間だね」

カインが椅子を立ち、跪くようにしてリリアの足元へと潜り込んだ。

重厚なベルベットの裾が捲り上げられる。そこには、ヴィクトールによって設計された金属の支柱が、彼女の白い脚を無慈悲に、かつ優雅に固定している様が露わになった。

「……んんっ！！……んんんんーっ！！♡」

カインの手が、彼女の太腿をなぞる。ドレスの中、誰にも見えない暗がりで、リリアの聖域はすでに蜜と、昨夜注ぎ込まれた「重いゼリー」でぐちゃぐちゃに濡れそぼっていた。

「うわぁ……見てよヴィクトール。プラグが、彼女の絶頂を閉じ込めきれずに震えてる。……

リリア、こんなにナカを熱くして……。食事中のご主人様を誘惑するなんて、悪いお人形だね

え」

「……教育が必要なな。……カイン、彼女の『栓』を一度抜きなさい。……そして、新しい『重み』で、さらに厳重にパッキングするんだ。……食事の背景として、相応しい静寂を取り戻させるために」

ヴィクトールの冷徹な命令。カインが、リアのナカを占有していた超重量プラグを、一気に引き抜いた。

「……んんんああああーっ!!♡♡」

密閉されていた熱い愛の質量が、一気に体外へと溢れ出す。

フレームで固定された上半身は身動きひとつできないのに、ナカの感覚だけが、爆発的な解放感に襲われる。

彼女は絶頂の最中でさえ、優雅に左手を肘掛けに置き、胸を張った「生きた彫像」のポーズを維持させられる。

「……っ、……あ、……あ、……あははは……っ♡」

おしゃぶりの隙間から涎が垂れ、真珠のネックレスに滴り落ちる。カインは、空っぽになった彼女のナカへ、今度はさらに粘度の高い、鉛のように重い「永久充填用ゼリー」を流し込んでいった。

「……ほら、リリア。……君のお腹は、もう二度と空っぽにはならないよ。……一生、ボクたちの重みをナカに閉じ込めて、黙って飾られていようね」

仕上げに、カインはリリアの出口を、ダイヤをあしらった「拡張型バルブ・プラグ」で塞いだ。ナカでバルブが開かれ、彼女の出口を完全に密閉する。もはや一滴の蜜さえも、主人の許しなく外に出ることは叶わない。

ヴィクトールが、リリアの頬についた涙をナプキンで優しく拭い取った。リリアは、ナカを支配する圧倒的な重量感と、指先ひとつ動かさない絶望的な固定の中で、ただ「……っ！！♡」

と、言葉にならない悦びを、喉の奥で鳴らし続けるのであった。

ダイニングに響くのは、主たちの優雅なカトラリーの音と、人形へと堕ちた少女の、熱く湿った呼吸の音だけだった。

ヴィクトールが冷徹な視線で彼女の全身をなぞる。リリアは、あらわな姿を直視され、思わず脚を閉じようとした。

だが、カインがそれを許さない。

「だめだよ、リリア。お人形は、恥ずかしいなんて思わないんだから。……ほら、脚を広げて。ボクたちが隅々まで磨いてあげるんだからさ」

カインが彼女の両膝を掴み、乱暴に左右へと割り開いた。

露わになる、昨夜から「密閉」され続けている彼女の聖域。プラグのクリスタルが、朝の光

を反射して不道德に輝いている。

「……………そこ、……………みないで……………っ。……………わたし、……………まだ、……………お嬢様、なの……………っ!!」

「おやおや。まだそんな可愛らしいことを言っているのかい？」

ヴィクトールが、冷たい聴診器のような器具を彼女の胸元に当てた。

「心音が速すぎる。……………リリア、君の心臓は、僕たちの所有物だ。……………自分の意志で勝手に脈打たせるのは、規律違反だよ」

ヴィクトールが、リリアの首のチョーカーにある小さなネジを回した。カチリ、と音がして、チョーカーの内側から微かな電流——「知性を痺れさせる刺激」が彼女の脊髄を走った。

「……………ん、……………んんん——っ!!♡」

「あはは！見てよ、ヴィクトール！叱られただけで、ナカのプラグが『キュルルン』って震えてるよ！……………ねえ、リリア。お嬢様のプライドなんて、この重たいお腹の中に溶かしちゃ

いなよ」

カインが、リリアの平らなお腹を「ぽん、ぽん」と優しく叩く。ナカで液体が揺れ、プラグを内側から圧迫する。リリアは、逃げ場のない快感に、お口をパクパクと金魚のように開かせた。

「羞恥は最高のスパイスだよ。……君が『自分はモノだ』と心から理解するまで、何度でもこの『検分』を繰り返してあげよう」

ヴィクトールが彼女の目元を優しく、けれど逃がさないように手で覆った。視界を奪われ、聴覚と、ナカを支配する「重み」だけが世界のすべてになる。

リリアは、自分が「人間」としての誇りを、一滴ずつ二人の主人の手によって絞り出されていく恐怖と、それ以上の、抗いがたい至福の深淵へと堕ちていくのであった。

ヴィクトールが彼女の腰のロックを解除すると、チタン製の外骨格が微かな金属音を立ててその拘束を解く。しかし、数時間の固定と、ナカに詰め込まれた「鉛のゼリー」の重みによって、リリアの筋肉はすでに自らの意志で動く方法を忘れていた。

「……あ、……あ、……あは……」

支えを失ったリリアの身体が、崩れるようにヴィクトールの胸へと倒れ込む。重厚なベルベットのドレスが、主人の腕の中で不器用に波打った。ヴィクトールは彼女を軽々と抱き上げ、館の最上階にある「管理寝室」へと運ぶ。そこは、柔らかなシルクのクッションと、彼女の身体をあらゆる角度から愛でるための三面鏡に囲まれた、甘美な解剖室だった。

「さあ、リリア。今日一日の『展示』で、君の表面には汚れがつき、内側は飽和している。……綺麗にしてあげよう」

カインが慣れた手つきで、彼女のドレスのボタンを一つずつ外していく。拘束具から解放さ

れ、布地が床に滑り落ちるたび、リリアの肌は解放感に震えた。しかし、最後に残った極限の
コルセットだけは、ヴィクトールの指先によって、さらに一段、容赦なく引き絞られた。

「……ひ、……あ、……んんっ！！♡」

肺に溜まった空気が強制的に押し出され、リリアの視界が火花を散らす。全裸の身体に、異常に細いウエストと、高いチョーカー。そしてナカを満たす重量。その不自然な姿こそが、二人の好事家にとっての「完成図」だった。

「……リリア。これから君の『知性』を洗浄する。……難しい言葉も、昨日までの記憶も、すべてこの熱の中に溶かしてしまいなさい」

ヴィクトールが、温められた粘膜保護用のオイルをリリアの全身に塗り広げていく。

冷徹な指先が、彼女の鎖骨、肋骨、そして震える太腿の付け根を、解剖学的な正確さで愛撫する。それは快楽を与えるためというより、彼女が「モノ」であることを刻み込むための儀式

だった。

「……ねえ、ヴィクトール。彼女のナカ、もうパンパンだよ。……ボクたちの『新しい証』を入れる隙間がないくらい」

カインが、リリアの足の間に顔を寄せ、密閉されていた「ダイヤのプラグ」をそっと回した。その瞬間、リリアの身体が大きく跳ね上がる。

「……ん、……んんーっ！！♡（だめ、……ださないで、……わたしの、……おもたいのが……っ！！）」

言葉にならない拒絶とおねだり。バルブが開放されると、ナカに充填されていた「鉛のゼリ」が、主人の熱によってドロドロに溶かされた状態で、一気に吐き出された。

内側から「重み」という名の支えを失ったリリアは、あまりの喪失感に、おしゃぶりを噛み締めながら涙を流した。

「……いい子だ。空っぽになったね、リリア。……さあ、ここからは『お掃除』の時間だ」

ヴィクトールがリリアの後ろから、その細すぎる腰をガッチリとホールドした。カインはリリアの正面に回り、彼女の濡れた瞳を覗き込む。

「ボクたちの熱で、君のナカを隅々まで『消毒』してあげる。……リリアは何も考えなくていい。……ただ、注ぎ込まれる熱さを数えていればいいんだよ」

ヴィクトールの「理知的な質量」が、リリアの背後から、一切の容赦なく彼女の聖域を貫いた。

同時に、カインの「奔放な熱」が、彼女のお口のビットギャグを外し、その代わりに彼女の呼吸を奪い去った。

「……ん、……んんんああああーっ!!♡♡」

前と後ろ。上と下。リリアの身体は、二人の好事家によって完全に「占有」された。

ヴィクトールが、コルセットの紐をさらに引き、彼女の腹部を限界まで凹ませる。その狭く
なった空間へ、二人の主人が同時に、容赦のない「愛」を注ぎ込んでいく。

物理的な衝突。内臓が押し潰されるような圧迫感と、それを上書きする圧倒的な多幸感。

リリアの脳内では、自分という存在を定義していた最後の糸がプツリと切れた。

(……………あは、……………わたし、……………なかまで、……………ご主人さまたちの……………お掃除用具に、
なっちゃう……………っ!!♡)

「……………聞こえるよ、リリア。君のナカが、歓喜で僕たちを締め付けているのが。……………知性を捨
てなさい。……………ただの『受容器』になりなさい」

ヴィクトールの低く冷たい囁きが、彼女の耳の奥を焼く。

カインは、彼女の髪を乱暴にかき上げながら、彼女の喉の奥まで自分の証を突き立てた。

「お掃除、お掃除！……………ほら、リリア。ナカがいっぱいになってきたよ。……………ボクたちの熱

で、お腹がぼっこり膨らむまで、たっぷり充填してあげるからねえ!!」

数十分、あるいは数時間。

時間の感覚さえ失ったりリリアのナカには、これまでのゼリーとは比較にならないほどの、熱く、濃密な種が、限界を超えて注ぎ込まれ続けた。

リリアは全身を激しく痙攣させながら、二人の主人の腕の中でぐったりと力を抜いた。

彼女の口元からは、受け止めきれなかった愛の飛沫が「ドロリ」と溢れ出している。

「……仕上げだ。カイン、彼女を『密閉』しなさい。……一滴も、僕たちの愛を逃さぬように」

「了解!……ほら、リリア。今日一番の『ご褒美』だよ。……この特製の『永久密閉プラグ』

で、君を僕たちの所有物として完成させてあげる」

カインが、リリアの火照った出口に、これまでで最も太く、重厚なクリスタル・プラグを

「ドスン」と根元まで打ち込んだ。

ナカでバルブが広がり、注ぎ込まれた二人の熱を、完全に閉じ込める。

「……ん、……んんう……っ！！♡（おながが、……パンパン、……あついの、……しあわせなの……っ！！♡）」

リリアはおしゃぶりを再び咥えさせられ、主人の足元で小さく丸まった。

コルセットの締め付けと、ナカの充填感。彼女は今、内側も外側も、完全に二人の好事家の「モノ」としてパッキングされたのだ。

「……おやすみ、リリア。……明日、目が覚めたとき、君はもっと『お人形』に近づいているはずだよ」

ヴィクトールが、彼女の頭を優しく「よしよし」と撫でる。リリアは深い、深い、幸福な忘却の闇へと堕ちていくのであった。

翌朝、リリアが目を覚ましたとき、彼女の脳裏には昨夜の「熱」の余韻だけが、ピンク色の
澱のように沈殿していた。

ヴィクトールのコルセット、カインの重い宝石。それらは一時の「素体」の状態へと戻されていたが、彼女のナカには依然として、二人の主人が注ぎ込んだ「永久密閉プラグ」がずっしりとした重みを保ち続けている。

「おはよう、リリア。……さあ、今日の君は誰になろうか」

ヴィクトールが、巨大なワードローブの扉を開く。そこには、数えきれないほどの「属性」が並んでいた。清廉なシスター、不道德なバニー、従順なメイド。

リリアは、主人の指先が衣装を選ぶのを、おしゃぶりを咥えたまま虚ろな瞳で見つめていた。もはや彼女に「自分はこうありたい」という意志はない。ただ、着せられた服に合わせて、自分の「中身」を書き換えてもらうのを待つだけの、空っぽな器だった。

「今日はこれにしよう。……清らかなシスター。……君の罪深いナカを、祈りと快感で浄化してあげるよ」

ヴィクトールが選んだのは、目も眩むような純白の修道服だった。しかし、それは本来の修道服とは程遠い。肌を透かすほどに薄い絹。胸元は大胆にくり抜かれ、下半身は前後の布が分かれた、主人の「診察」をいつでも受け入れられる不潔な構造をしていた。

「……あ、……し、……シスター……？ ……わたし、……いい子に、……おいのり、……するの……っ♡」

リリアの腕がヴィクトールの手によって高く上げられ、関節が衣装の裏に仕込まれたバネによって、祈りのポーズで固定される。

ヴィクトールは、リリアの頭にベールを被せると、彼女の首を再び、高い銀の十字架がついたチョーカーで締め上げた。

「……いいかい、リリア。シスターは、声を上げてはいけない。……ナカがどれほど熱くても、顔だけは清らかに、主人の愛を享受しなさい。……それが、今日の君の『定義』だ」

「あはは！ 聖職者の格好をしてるのに、ナカはボクたちの『熱』でパンパンなんて、最高にエッチだよ、リリア！」

カインが乱暴に、リリアの修道服の裾を捲り上げた。昨夜の「密閉ブラグ」が引き抜かれる。リリアの身体がガクガクと震え、ベールの下で瞳が白濁した。

「……んん、……んんあああああつ！！♡」

「ほら、シスター。我慢しなきゃ。……祈りの時間だよ」

カインが用意したのは、シスターの属性に合わせた「聖なるお掃除棒」。それは、彼女の力を激しく叩き、浄化（絶頂）させるための、冷たくて太い銀のデバイスだった。

ヴィクトールが彼女の腰を背後から固定し、カインが正面から、彼女の「祈り」を蹂躪し始

める。

一時間後。ヴィクトールが「次はこれだ」と声をかける。

シスターの衣装は脱ぎ捨てられ、次は、黒いエナメルが光る「バニーガール」の衣装が彼女の肉体を締め付けた。

「……びょん、……びょん。……わたし、……うさぎさん、……なの……っ♡」

衣装が変わるたび、リリアの口調が、そして意識が、その属性に引きずられて変質していく。シスターのときは「お祈り」を、バニーのときは「交尾」を。ヴィクトールによる論理的な「役割の刷り込み」と、カインによる「属性に合わせた玩具」の変更。

その果てしないループの中で、リリアの「リリア」としての自意識は、完全に削り取られ、剥離していった。

（……わたし、……なに着ても……おんなじ。……なにをされても……しあわせ……。……た

だの、……おきがえ、……おにんぎょう……っ!!!(♡)

「……いい。……実にいい。……属性を奪い、器だけを残す。……これこそが、僕たちのドルハウスの完成形だ」

ヴィクトールは、満足げに彼女を眺めた。リリアの脳内は、いまやパステルピンクのノイズで埋め尽くされている。メイド服を着せられれば「お掃除」をせがみ、ナース服を着せられれば「お注射」を求めて震える。

もはや「羞恥」という言葉は、彼女の辞書から消え去っていた。

「あはは！最後はこれだね。……リリア、君の本当の姿。……全裸の赤ちゃんだよ!!」

カインが、全ての衣装を脱ぎ捨てさせ、リリアに巨大なパフのついた、真っ白な「うさぎ柄のパンツ」を当てがった。

お口には、ピンク色に淡く発光する特製の「絶頂おしゃぶり」。

首には、もう外れることのない、主人の名が刻まれた真珠の首輪。

「……っ!!♡♡♡」

リリアの瞳から、ついに知性の光が完全に消失した。おしゃぶりを強く吸い込むたびに、ナカに挿入されたうさぎさんデバイスが「キュルルンッ♡」と過去最大の音で共鳴する。

彼女はもう、難しい言葉も、自分の名前も、昨日の記憶も、すべてを「幸福な忘却」の彼方へと投げ捨てた。

「……リリア、ではないね。……今日から君は、僕たちの『小さな愛玩具』だ」

ヴィクトールが、うさぎ柄のパンツ姿で膝立ちになり、おしゃぶりを無心に吸うリリアの頭を優しく「よしよし」と撫でる。

カインが、彼女のパンパンに張ったお腹を「ぽん、ぽん」と叩く。

「……んん、……んう、……んっ!!♡」

お腹に響く衝撃が、ナカの共鳴を誘い、リリアは言葉にならない甘い声を漏らしながら、再び、絶頂の多幸感へと吞まれていく。

衣装を脱ぎ捨て、属性を剥ぎ取られた先に残ったのは、ただ主人の愛（快感）に反応するためだけに存在する、究極の「無知」という名の完成品だった。

ドールハウスの窓の外では、月が静かに彼女を見守っている。

けれど、リリアがその月を見ることが二度とない。彼女は一生、この閉ざされたパステルピンクの檻の中で、二人の好事家に「よしよし」され続け、熱い「密閉」を繰り返されるだけの、幸福な「モノ」として生きていくのだ。

その夜、館のメインホールは、禁忌の美を愛でる数人の「好事家」たちの溜息で満たされていた。

ホールの中央、円形の展示台の上に、リリアは「設置」されていた。今日の彼女は、これまでの衣装よりも豪華で、そして残酷な、純白のウェディングドレスを纏わされている。しかし、そのスカートは不自然なほどに大きく膨らんでおり、裾からは彼女の脚が見えない。

ドレスの内部には、ヴィクトールが設計した重厚な「自立式固定フレーム」が組み込まれており、リリアは一步も動くことができないどころか、その場に立ち尽くすことさえ「フレームに吊り下げられる」ことで強制されていた。

「……んん、……んんーっ」

お口のビットギャグは、ドレスと同じシルクの布で覆われ、彼女の表情をより神秘的な、物言わぬ聖母のように見せていた。

だが、そのドレスの下……。リリアは、うさぎ柄のパンツと、ヴィクトールとカインが数時間がかかりで充填した、過去最大の「熱（種）」を密閉したまま、観衆の前に晒されていた。

「紳士淑女の皆さん。……ご紹介しよう。我が館の最高傑作、リリアだ」

ヴィクトールが誇らしげに杖で展示台を指し示す。招待客たちが、リリアの周りを取り囲み、手にしたルーペやオペラグラスで彼女の「細部」を観察し始めた。

「ほう……これは素晴らしい。このウエストの細さ。コルセットの締め上げが、もはや生物の限界を超えている」

「肌の質感を見てごらん。まるで本物のビスクドールのようなだ。……ヴィクトール、彼女は本当に生きているのかね？」

一人の老紳士が、リリアの頬に指を触れた。

リリアの瞳が微かに揺れる。人前で触れられる屈辱。しかし、首のチョーカーが彼女の拒絶を許さない。彼女はただ、主人の「最高傑作」として、無機質な視線を虚空に投げ続けるしかなかった。

「もちろんです。……リリア、客人に挨拶を下さい。……『音』でね」

ヴィクトールがリモコンのスイッチを入れた。その瞬間、ドレスの下、リリアのナカに深くパッキングされた「うさぎさん」が、会場全体に響き渡るほどの轟音で振動を始めた。

「……ひ、……ひぎいいい！！♡……んんん……っ！！♡♡」

ドレスの裾がガタガタと激しく震える。

フレームに固定されているため、上半身は優雅なポーズを保ったままだが、そのナカでは狂ったような衝撃が彼女の理性を粉々に粉碎していた。リリアの瞳が瞬時に白濁し、おしやぶりを噛み締めながら、お口の端から銀色の糸が垂れ落ちる。

「あはは！ 見てよみんな！ 彼女、ナカがパンパンすぎて、振動の逃げ場がないんだ。……ほら、お腹のところが『ぽっこり』動いているのが見えるだろ？」

カインがドレスの腹部を叩くと、パツパツに張った「重み」が、ポヨン、と不自然な弾力を

返した。観衆から、感嘆の声が上がる。

「素晴らしい……。これほどまでに完璧な『器』は見ることがない」

「中身は……ヴィクトール、君たちが充填したものかね？」

「ええ。昨夜から、一滴も漏らさずに『密閉』させてあります。……彼女は今、自分の重みで意識を保つのが精一杯なのです」

好事家の一人が、興味深そうにリリアの足元に跪いた。ドレスの裾を少しだけ捲ると、そこにはヴィクトールの名が刻まれた黄金の足枷と、震える脚、そしてかわいらしいうさぎ柄のパンツが露わになる。

「……おや。これほど高貴なドレスの下に、こんな子供のようなのを。……彼女は、自分が何者か分かっているのかね？」

「彼女に名前はありません。言葉を捨て、恥を捨て、ただ我々の愛を貯蔵するためだけに生き

る、生きた調度品です」

ヴィクトールの言葉に応えるように、リリアはおしゃぶりを「ちゅうう……♡」と力強く吸った。

大勢の他人に、自分の最も恥ずかしい部分を論じられ、中身の重さを観察されている。

その究極の「モノ扱い」が、リリアの脳をパステルピンクの泥濘へと沈めていく。

(……あ、……あは、……みんな、……みてる。……わたしの、……おなかの、……おもたいの……。……わたし、……おにんぎょう、……だから……。……はずかしく、……ない……。……もつと、……みて……。っ!!♡)

「……さて。……特別に、彼女の『密閉』がどれほど完璧か、どなたか確認してみませんか？」

カインの悪戯っぽい提案に、招待客たちが色めき立った。一人の婦人が、好奇心に満ちた目でリリアの股間に手を伸ばす。パンツの上から、ズッシリとした重みを掌で受け止め、ぐい、

と押し上げた。

「……んっ！……んんんんーっ！……♡♡」

ナカの液体が、婦人の手によって圧迫され、リリアの子宮を直接突き上げる。出口を塞ぐ「永久密閉プラグ」が、彼女の身体を内側から裂かんばかりに主張する。

「まあ！なんて重たいの……。それに、この熱。……ドレス越しでも、彼女が絶頂で燃え上がっているのが分かるわ」

「……いい子だ、リリア。……皆さんに褒められて、嬉しいね」

ヴィクトールが、リリアのペールを優しく上げ、汗に濡れた額を拭った。

リリアは、もはや自分が「リリア」であったことさえ思い出せない。

数分おきに誰かの手が自分の身体を検分し、ナカの重さを確かめ、そのたびにナカのうさぎ

さんが「キュルルンッ♡」と鳴り響く。

夜会が終わる頃には、リリアは完全に、主人の靴先を見つめるだけの「全知全能の幼児」へと退行していた。客たちが去った後、静まり返ったホールで、ヴィクトールとカインは、ぐったりと吊り下げられたままの彼女を愛おしそうに見つめる。

「……完璧だったよ、リリア。……君は今夜、世界で一番美しい『家具』だった」

「あはは！ ほら、ヴィクトール。彼女、おしゃぶりを離さないよ。……もう、これがないと息もできないみたいだ」

カインがリリアのお腹を「よしよし」と撫でる。

リリアは、おしゃぶりを吸いながら、ナカの圧倒的な重量感に抱かれ、ただ幸福な「モノ」としての余韻に浸っていた。

自分を「見る」他人の視線さえも、今では彼女を固定するための、目に見えない拘束具の一部となっていた。

客たちが去り、静寂が戻ったメインホール。シャンデリアの光が落とされた薄暗がりの中で、リリアは依然として展示台の上に「設置」されたままだった。豪華なウェディングドレス、その内部に仕込まれたチタン製のフレーム。それらはリリアが絶頂の余韻でどれほど腰を砕こうとしても、彼女を「優雅に直立した花嫁」のポーズに繋ぎ止めている。

「……は、……あ、……ふえ、……ふええ……っ」

おしゃぶりを吸う音だけが、虚ろなホールに響く。リリアの脳内は、先ほどまで浴びせられていた無数の視線と、パンツの上から触れられた他人の手の感触で、ピンク色の霧に包まれていた。

「お疲れ様、リリア。……素晴らしい夜だったよ。君が誰の手によって『密閉』され、誰の所有物であるか……それを皆に知らしめることができた」

ヴィクトールが、リリアの背後に回り、ドレスの背中ファスナーを下ろした。だが、フレームは外さない。彼はリリアを固定したまま、その白い背中を剥き出しにした。

一方、カインはリリアの正面に跪き、幾重にも重なったドレスのスカートを、顔の高さまで捲り上げた。

「あはは！ 見てよ、ヴィクトール！ うさちゃんパンツが、さっき婦人に押された形のまま凹んでる。……リリア、他人の手がそんなに気持ちよかったの？ ボクたちの『お掃除』じゃ足りなかったのかな？」

カインが、リリアのパンパンに張ったお腹を「ぽんっ！」と強く叩いた。

ナカの液体が波打ち、バルブ・プラグを内側から激しく叩く。

「……んんっ！！……んんんーっ！！♡♡」

リリアの身体が、固定フレームの中で大きく仰け反った。首のチョーカーが喉を圧迫し、彼

女の悲鳴を甘い喘ぎへと変える。

「……教育が必要だね。……カイン、彼女の『栓』を解きなさい。……今夜は、一滴も余さず、僕たちの新しい『熱』で彼女を塗りつぶすんだ」

ヴィクトールの冷徹な宣言とともに、カインがリリアのパンツを乱暴に引き裂いた。

展示されていた間に極限まで高まっていたナカの圧力が、ダイヤのプラグが引き抜かれた瞬間に爆発する。

「……ひ、……ひぎいいいっ!!♡」

密閉されていた「鉛のゼリー」と主人の愛が、滝のように溢れ出し、展示台を汚していく。

空っぽになる。自分の支えだった「重み」が失われる恐怖と喪失感。リリアはおしゃぶりを力いっぱい吸い込み、涙を流して助けを求めた。

「……からっぽ……、……いやあ、……おもたいの、……かえしてえ……っ!!♡」

「ああ、返してあげるよ。……昨日までのものよりも、ずっと熱くて、逃げられない『愛』をね」

ヴィクトールが、リリアの背後から、彼女の細い腰をフレームごと抱きしめた。そして、ドレスの隙間から、彼女の「内側」へと自身の存在を力強く突き立てた。

同時にカインが正面から、彼女の太腿を掴んで広げ、もう一つの「熱」で彼女を貫く。

「……あ、……あが、……あああああっ！！♡♡」

二人の主人の「熱」が、リリアの狭いナカで激しく衝突する。固定フレームがあるせいで、彼女は衝撃を逃がすことができない。突き上げられる振動のすべてが、彼女の神経を直接焼き、脳を白濁させていく。

「……リリア、聞こえるか。……君の右側は僕が、左側はカインが占有している。……君の中に、君自身の居場所など、もうどこにもないんだ」

ヴィクトールが彼女の耳元で、理性を削り取るような低い声で囁く。

カインは、彼女の首にかかった真珠のネックレスを掴み、彼女の頭を乱暴に揺らした。

「あはは！　すごいよ！　リリアのナカ、ボクたちの熱が混ざり合って、沸騰してるみたいだ！！　ほら、もっと『ちゅうう……♡』っておしゃぶり吸って！　知性を全部、そこから吐き出しちゃいなよ！！」

蹂躪は夜が更けるまで続いた。フレームに固定されたままのリリアは、逃げることも、へたり込むことも許されず、ただ「二人の王の器」として、限界までその身を捧げ続けた。

ヴィクトールが彼女のコルセットをさらに一段、親の仇のように引き締め、カインが彼女のナカを、過去最高の密度の「種（愛）」で満たしていく。絶頂が波のように何度もリリアを襲う。一度いくたびに、彼女の記憶の一部が欠落していく感覚。没落した実家の風景、自分の本名、言葉の概念……。それらがすべて、二人の主人の「熱」に上書きされ、消えていく。

「……あ、……あ、……ごしゅ、……じん、……さまあ……。……わたし、……しあわせな……おにんぎょう、なのおお……っ!!♡」

最後の一撃。ヴィクトールとカインが同時に、リリアのナカへと自分たちの「愛」を余さず放出した。

ナカが、物理的に膨らむほどの質量に満たされる。リリアは白目を剥き、固定フレームの中で全身を弓なりに反らせ、おしゃぶりを口から飛ばさんばかりの勢いで絶頂した。

「……仕上げだ。……カイン、これを使え」

ヴィクトールが差し出したのは、これまでのものとは一線を画す、巨大な『永久密閉プラグ』だった。そのプラグを、カインがリリアの熱い出口へ、容赦なく「ドスン!」と根元まで打ち込む。

「……ん、……んんんーっ!!♡♡」

ナカでバルブが最大限に広がり、注ぎ込まれた二人の「熱」を、鉄壁の硬さで閉じ込めた。一滴も、一分の隙間もない、完璧な密閉。

リリアは、激しく脈打つナカの重量感に支配され、ドレスを汚したまま、フレームに吊るされた状態でぐったりと頭を垂れた。

瞳にはもう、何の意志も宿っていない。彼女の均衡（自意識）は完全に崩壊し、そこにはただ、主人の愛を貯蔵し続けるための「生きた貯蔵庫」だけが残されていた。

「……愛しているよ、僕たちのかわいい、調度品」

ヴィクトールが、汗と涎で汚れたリリアの顔を優しく「よしよし」と撫でる。

リリアは、もはやおしゃぶりを吸う力さえ残っていないほど知性を溶かされながら、ナカの圧倒的な重みに抱かれ、深い、深い、忘却の底へと沈んでいった。

翌朝、館を包む霧はさらに深く、世界は白一色に塗りつぶされていた。

管理寝室の巨大な天蓋付きベッド。その中央で、リリアは目覚めた。……いや、それは「目覚め」と呼ぶにはあまりに他律的な、ただの意識の浮上だった。

「……あ、……う……?」

リリアは自分の手を見つめた。だが、その手が「自分のもの」であるという認識さえ、もはや希薄だった。

指にはめられた重厚なリング。首を固定する高いチョーカー。そして、お腹を内側からずっしりと押し広げている「二人の主人の重み」。

彼女は起き上がろうとしたが、ヴィクトールが前日に施したコルセットが、彼女の可動域を限界まで制限していた。さらに、重い宝石の鎖が彼女の手足をベッドの支柱に繋ぎ留めており、彼女は仰向けに寝かされたまま、手足をバタつかせることしかできなかった。

「おはよう、僕たちのかわいい、小さな赤ちゃん」

ヴィクトールが、温かなミルクの入った哺乳瓶を手に、ベッドサイドに現れた。

リリアは彼を見て、何事か話そうとした。……自分はリリア・ド・ヴァランシエールである。自分はなぜここにいるのか。

だが、喉から漏れ出たのは、意味をなさない湿った音だけだった。

「……ふえ、……あう……んんう……♡」

「いい子だ。……言葉なんて、君にはもう必要ないんだよ。……難しいことを考える脳は、昨夜の絶頂で全部溶けてしまったからね」

ヴィクトールが、お口に嵌められていたビットギャグをそと外した。

自由になったはずの彼女の唇。だが、リリアは何かを喋る代わりに、反射的にヴィクトールの指を「ちゅうう……」と吸い込んだ。知性を失った彼女の生存本能が、主人の温もりを「乳

首」として求めていた。

「あはは！見てよ、ヴィクトール！リリア、本当に赤ちゃんになっちゃったんだ！！ほら、今日のボクからのプレゼントだよ」

カインが、ベッドの上に色とりどりの「知育玩具（という名の電気玩具）」を並べた。

そして、リリアの顔を覗き込み、彼女のお口に特製の「絶頂おしゃぶり」を深く押し込んだ。

「……ん、……んんーっ！！♡」

それを吸うたびに、ナカに深くパッキングされたうさぎさんが、リリアの脊髄を直接揺さぶるような甘い共鳴を上げる。

おしゃぶりを吸うという、赤ちゃんの最も原始的な動作が、彼女にとっては「絶頂へのトリガー」へと書き換えられていた。

「さあ、お食事の時間だよ。……リリア、お口ではなく、君の『下の口』に、今日の分の栄養

をたっぷり注ぎ込んであげよう」

ヴィクトールとカインが、リリアのうさぎ柄のパンツを優しく脱がせた。昨夜の永久密閉ブラグが、二人の手によって慎重に引き抜かれる。

「……ひ、……ひいいいっ!!♡」

密閉されていた熱い質量が溢れ出し、リリアの身体が幼児のように激しく跳ねた。空っぽになった喪失感に、彼女は「あう、あう……!!」と、おしゃぶりを震わせて泣きじゃくる。

「泣かないで、いい子だね。……ほら、新しい『離乳食』だよ。……君がずっと僕たちのモノでいられるように、特別な魔法を込めてあるんだ」

ヴィクトールが用意したのは、高濃度の粘膜炎養剤と、二人の「熱」を特殊なゲル状に固めたものだった。それを太いシリンジで、リリアのナカへとゆっくり、確実に「充填」していく。お腹が、ぽっこりと幼児のように膨らみ、リリアの視界は再びパステルピンクのノイズに支

配された。

「……あ、……あは、……おな、……なか……ばんばん、……しあわせ……っ♡」

リリアは、もう自分の名前も、自分がかつて「人間」であつたことも思い出せない。彼女にとっての世界は、お口にある「おしゃぶり」の甘さと、ナカを支配する「圧倒的な重み」、そして自分を「よしよし」してくれる二人の主人の手のひら。それだけがすべてとなつた。

「……いい眺めだ。……カイン、彼女をあそこへ運ぼう。……一生、あのゆりかごの中で、絶頂の夢だけを見せてあげるんだ」

「了解！……さあ、リリア。君の本当の家（檻）に行こうね」

カインが、パンツを履かせ直され、真珠の重みで身動きのとれないリリアを抱き上げた。

リリアはおしゃぶりを「ちゅう……ちゅう……♡」と夢中で吸い込みながら、主人の胸に顔を埋めた。

かつてのお嬢様の自意識は、いまや一滴も残っていない。そこにあるのは、ただ二人の好事家に「よしよし」されることでしか生存を許されない、究極に無力で、究極に幸福な、一つの「愛玩具」だった。

館の廊下を進むたび、リリアの首の鈴が「チリン、チリン」と、彼女の知性の葬送曲を奏でる。彼女は、ナカの圧倒的な重量感に抱かれながら、ただ幸福な幼児退行の深淵へと、どこまでも堕ちていくのであった。

館の最深部、かつてリリアが足を踏み入れたことのない聖域に、その「家」はあった。

天井まで届く巨大な硝子ケース。内側は最高級のシルクとレースで装飾され、周囲には彼女を最も美しく照らすためのガス灯が、星の瞬きのように配置されている。

「さあ、リリア。……ここが君の、新しい、そして最後の居場所だ」

ヴィクトールの声が、もはや知性を失ったリリアの鼓膜を優しく震わせる。カインに抱き抱えられた彼女は、自分の足で立つ方法を完全に忘れていた。うさぎ柄のパンツの中にたつぷりと貯め込まれた「二人の主人の重み」と、首にかかった真珠の重量感が、彼女の意識を現実から切り離し、永遠の微睡（まどろみ）へと誘っている。

「…………ふえ、…………ふええ…………っ♡」

おしゃぶりを吸うたびに、リリアのナカのうさぎさんが『キュルルンッ♡』と鳴り、彼女の身体を微かに跳ねさせる。カインはその震えを愛おしそうに眺めながら、彼女を硝子ケースの中にある、黄金の支柱へとセットした。

ヴィクトールが最後の仕上げとして、彼女のドレスの裾を整え、関節のひとつひとつに目に見えないほどの細いワイヤーを通していく。

リリアの首は誇り高く反らされ、右手は何かをねだるように宙を舞い、左手は自分の膨らん

だお腹を愛おしそうに支えるポーズ――。

二人の主人が、数年かけて磨き上げた「究極の静止」が、そこに完成した。

「……リリア。君はもう、息をする必要さえない。……ただ僕たちの視線を受け、僕たちの愛を貯蔵し続けるだけの、完璧なモノだ」

ヴィクトールが、彼女の出口に嵌まった「双子紋の永久密閉プラグ」のネジを、最後の一回しで固く固定した。

ガチリ、という運命の音が響く。

これで、彼女のナカに閉じ込められた二人の「熱」は、二度と外界に触れることはない。彼女の肉体は、永遠に二人の愛を熟成させ続ける「生きた貯蔵庫」として密封されたのだ。

「あはは！ 見てよ、ヴィクトール！ リリアの目、もうボクたちのことさえ映してないよ。

……ただ、絶頂の夢を見てるだけの、綺麗な硝子の瞳になっちゃった」

カインが硝子ケースの扉を閉め、金色の鍵をかけた。

ケース越しに見るリリアは、もはや人間としての血の通った温もりを感じさせないほどに神格化され、圧倒的な「物（ブツ）」としての存在感を放っていた。

彼女の知性は、もう存在しない。

「私はリリア」という意識も、「没落した令嬢」という悲しみも、すべてはヴィクトールのコルセットに締め上げられ、カインの宝石に押し潰され、二人の濃厚な蹂躪によってパステルピンクの泡となって消えていった。

（……あ、……あは、……わたし、……おにんぎょ、……しあわせ……）

硝子ケースの内側、リリアの脳の片隅で、最後の一片となった自意識が、ふわりと消えかかっていた。

外の世界では、雨が降り、風が吹き、人々は争い、時代は変わっていく。

けれど、この閉ざされたドールハウスの中だけは、永遠の静寂と、永遠の密閉が約束されている。

「……愛しているよ、リリア。……一生、こうして僕たちが君を『お掃除』し、君を着せ替え、君を愛でてあげよう」

「ボクたちのお掃除がないと、君はお腹が空いて死んじゃうもんねえ。……ずっと、ずっと、ボクたちの赤ちゃん（ドール）でいてね」

ヴィクトールとカインは、硝子越しの彼女の頬を、まるで聖遺物を撫でるような手つきで愛撫した。

リリアはおしゃぶりを吸い込みながら、ナカの圧倒的な重量感に抱かれ、主人の手のひらが硝子を叩く微かな振動を、心地よい子守唄として受け入れていた。

彼女は今、自分という檻から解放され、二人の王が支配する「幸福な忘却」の檻へと、完全

に、永久に移り住んだのだ。

言葉はなく、意志もなく、ただ「モノ」として存在することの、至上の悦び。

館の主たちが、彼女のケースを磨き上げる布の音。

ナカのうさぎさんが奏でる共鳴の調べ。

それらが混ざり合う中、リリアは微笑んでいるような、泣いているような、空虚で美しい表情のまま、永遠の静止へと至った。

——没落したお嬢様は二人の好事家の手によって、世界で最も幸福な、生きた調度品へと作り替えられたのである。

【従順なる黒鳥（メイド・オブ・サイレンス）】

午前十時。ヴィクトールの指先が、リリアの背中ファスナーを引き上げた。

今日の装束は、クラシカルなロングメイド服。だが、そのスカートの下には、脚の自由を完全に奪う「拘束用ペチコート」が幾重にも仕込まれている。

リリアの首には、白いレースのヘッドドレスではなく、彼女の声を物理的に封じる「銀の猿ぐつわ（ビットギャグ）」が嵌められた。

ヴィクトールが、彼女の手首を背後で交差させ、革の枷で固定する。

「リリア、今日の君に『奉仕』は求めない。……ただ、静止したまま僕たちの執務を見守る『背景』となりなさい。……動かないことこそが、君の唯一の仕事だ」

リリアは、自力で一步も動けないまま、書斎の隅に設置された。

メイド服という「仕えるモノ」の意匠を纏わされ、声を奪われたことで、彼女の脳内からは

『自分の意見』が消えていく。

一時間、二時間。主人のペンが走る音だけが響く中、リリアはナカに充填された「重い愛」の質量を感じながら、自分が部屋の柱や花瓶と同じ「機能を持たない家具」であることに、耐えがたい悦びを感じていた。

【罪深き白兎（バニー・オブ・プロフェーン）】

午後三時。ティータイムの「余興」として、カインがリリアを新たな衣装に着せ替えた。

漆黒のエナメルが陽光を弾く、ハイレグのバニーガール。

「あはは！ リリア、見てよ。……お尻に付けたこの大きな尻尾、実はナカのプラグと繋がってるんだ。……君が腰を振るたびに、ナカが『キュルルン』って鳴っちゃうんだよ」

カインが彼女の頭に、重い金属芯の入った長いウサギ耳を装着する。その重みで、リリアは顎を引くことさえできず、常に媚びるような上目遣いを強要された。

首元には大きな蝶ネクタイ。だが、その結び目は彼女の喉仏を圧迫し、呼吸をさらに浅く、甘く変えていく。

「……っ、……んっ!!……あ、……あは……っ♡」

カインが彼女の尻尾を「ぽんっ」と弾くたびに、ナカの振動が脊髄を突き抜ける。

お嬢様としての羞恥心は、この過激な衣装によって「剥き出しの露出欲」へと変換された。
うさぎ。繁殖のためだけの、無知な小動物。

カインに撫で回されるたび、リリアは自分の知性が、耳の付け根から熱となって蒸発していくのを感じていた。

【永遠の揺り籠（ベイビー・イン・クリスタル）】

深夜。一日の最後に行き着くのは、何の色も、何の属性も持たない「純白」だった。

ヴィクトールとカインは、リリアからすべての「役割」を剥ぎ取り、白いパンツと、真珠の首輪だけを残した。

「……………さあ、最後のお着替えだ。……………リリア、君は誰だい？」

ヴィクトールが、リリアのお口に、発光する「絶頂おしゃぶり」を深く差し込む。

リリアは、焦点の合わない瞳で主人を見上げ無意識に、けれど確かな力でそれを吸い込んだ。

「……………ふえ、……………あう……………んんう……………♡」

「そうだよ。……………君はもう、メイドでもバニーでもない。……………名前さえ持たない、僕たちの可愛い、可愛い『モノ』だ」

二人がかりで行われる、深夜のパッキング。衣装を着せ替えられるたびに削り取られた彼女

の自意識は、いまや一滴の澱（おり）も残っていない。

リリアは、主人の手で丁寧な「密閉」され、再び重厚な寝巻き——身動きを完全に封じる「拘束用シュミーズ」に包まれた。

どんな布を纏わされても、その下にあるのは主人の熱を貯蔵するだけの空っぽで幸福な肉体。リリアは宝石よりも重い瞼を閉じ、次の「着せ替え」を夢見ながら、深い忘却の底へと沈んでいった。

【背徳の聖母（プロフェーン・シスター）】

静謐な朝の光が差し込む礼拝堂風の小部屋でヴィクトールはリリアに純白の修道服を与えた。しかし、それは彼女の肌を透かし、胸元を大胆に露出させる不道德な意匠。首には重厚な銀の十字架が下げられているが、その鎖は短く、彼女の顎を常に上向かせるための「拘束具」として機能している。

「……リリア。今日の君は、神ではなく僕たちに祈りを捧げるのだ。……声なき祈りを、その『ナカ』で表現しなさい」

ヴィクトールが彼女の腰を締め上げ、フレーム入りのベールを被せる。視界が白く霞む中、リリアは跪かされ、指先を祈りの形で固定された。

カインがそのスカートを捲り上げ、シスターの清廉さを汚すように、重厚なバイブレーターを内蔵した「聖母のプラグ」を深く打ち込む。

「…………ん、…………んんんあああっ！！♡」

聖なる衣装を纏いながら、内側では狂ったような振動が脳を焼き続ける。

「私は清らかな存在」という衣装の自己暗示と、「私は汚されるだけの器」という肉体の実感が激しく衝突し、その火花がリリアの知性を急速に溶かしていく。

彼女はベールの下で白目を剥き、言葉にならない懺悔を、おしゃぶりの隙間から垂れる銀色の糸で綴るしかなかった。

【ゼンマイ仕掛けの愛娘（クロックワーク・ドール）】

カインが用意したのは、かつてリリアが憧れたであろう最高級のアンティーク・ドールを模したパニエたっぷりのドレスだった。

だが、その豪華なリボンやフリルの下には関節を一定の角度でロックする「義肢型拘束具」が仕込まれている。

「あはは！ リリア、見てよ。……背中に大きなゼンマイを付けたんだ。……これを回さないと、君は瞬きひとつしちやいけないんだよ」

カインが彼女の背中の鍵を「ガチ、ガチ」と回すと、リリアの身体に微弱な電流が走り、彼女のポーズが強制的に固定される。

右手を頬に当て、首を少し傾けた、完璧に可憐な「人形」のポーズ。もはや自分の筋肉で姿勢を保つことさえ許されず、彼女は外側からの張力とネジの締め付けによって、一輪の花のよ

うに静止させられた。

「……あ、……あ……」

知性は、静止とともに死滅していく。

「動けない」という絶望が、やがて「動かなくていい」という究極の安らぎへと反転する。

リリアは、主人がゼンマイを回してくれるのを待つだけの、冷たい磁器の肌を持つ愛玩物へと、精神の芯まで作り替えられていった。

本編後日談 硝子の檻の、その先で

館の最深部に位置する「聖域」。そこには、塵ひとつない静寂と、甘い沈香の香りが満ちていた。巨大な硝子ケースの中で、リリアは今日も、完璧な「静止」を保っていた。

今の彼女には、もうお仕着せの衣装は必要ない。全身を覆うのは、ヴィクトールが磨き上げた白磁の肌と、カインが選んだ数千の真珠。そして、彼女の肉体を永遠のポーズに繋ぎ止める、寶石入りの細い金糸だけ。

首を高く反らし、指先を優雅に遊ばせ、わずかに開いた唇からは、淡く光る「絶頂おしゃぶり」が覗いている。喉の奥で鳴る、幼児のような無垢な声。

おしゃぶりを吸うたびにナカに深く、深くパツキングされた『永久密閉プラグ』が、主人の愛を内壁へと強く押し付ける。

リリアの脳内に、言葉はもう存在しない。かつて彼女が「令嬢」であったことも、没落の悲劇に涙したことも、すべては遠い前世の夢のように色褪せて消え去った。

「おや、リリア。……少し、ポーズに甘えが出ているね」

硝子ケースの扉が音もなく開く。

ヴィクトールが白い手袋で彼女の顎を掬い、ミリ単位で角度を修正した。

リリアは抵抗しない。どころか、主人の指先が触れた瞬間に、恍惚とした涙を瞳に溜め、おしやぶりを「ちゅうう……♡」と力強く吸い込んだ。

「あはは！ 本当だ。ヴィクトールに触れただけで、ナカの充填剤が熱くなってるよ。

……ほら、リリア。……今日のお掃除（愛）の時間だよ」

カインが、リリアの足元に跪き、ドレスも何もない彼女の「聖域」へと手を伸ばす。

密閉プラグのバルブをわずかに緩めると、内側で熟成されていた熱い「種」が、宝石の鎖を濡らしながら溢れ出した。

「……ひ、……あ、……あはあああつ！！♡」

知性を奪われ、五感のすべてを「主人の管理」に委ねたリアにとって、この『お掃除』の瞬間こそが、彼女がモノとして生きる唯一の証明だった。空っぽになったナカへ、再び注ぎ込まれる、逃げ場のない新しい熱。ヴィクトールがコルセットの紐を限界まで引き、カインが彼女のナカを愛の質量でパンパンに膨らませる。

(……わたし、……おにんぎょう。ご主人さまたちの、……きれいな……おにんぎょう……)
意識の底で、最後に残った泡のような思いが弾ける。

恥ずかしいことは何もない。苦しいことは何もない。

ただ飾られ、磨かれ、内側を熱い愛で満たされ続けること。

その絶望的なまでの救済が、リアにとっての「幸福」のすべてだった。

「……よし、密閉完了だ。……さあ、また美しい『背景』に戻りなさい」

ヴィクトールが再び硝子の扉を閉じ、鍵をかける。

リリアは、ナカを支配する圧倒的な重量感に抱かれながら、再び静止した。夕刻の光が硝子に反射し、彼女の肌を、本物のビスクドールよりも美しく、無機質に輝かせる。

二人の主人は、そんな彼女を満足げに眺めながら、ティーカップを傾ける。

「今日はどこに新しい宝石を飾ろうか」「次はどんなポーズで固定しようか」

そんな会話を子守唄に、リリアは至福の表情で、永遠に醒めることのない絶頂の夢へと、ゆっくりと沈んでいった。

——こうして、少女は「人間」であることを完全に卒業し、二人の好事家の愛を永遠に貯蔵する、世界で最も美しい『生きた宝箱』となったのである。